國學院大學学術情報リポジトリ

# 大学における MLA 連携：國學院大學を一事例として検証する：小特集図書館と書物の世界



| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2023-02-05<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 安達, 匠, Adachi, Shou<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | https://doi.org/10.57529/00000461 |

# 大学におけるMLA連携
## —國學院大學を一事例として検証する—

安達　匠

### はじめに「アート・ドキュメンテーション学会第52回見学会」

アート・ドキュメンテーション学会（以後当学会の略称であるJADSと表記）は日本における博物館･図書館･文書館と言う３種の文化施設の異種間連携を扱った所謂「MLA連携」[(1)]について、早くからその重要性を指摘し、現在においてもMLA連携の研究・実践について先進的に取り組んでいる[(2)]。特にJADSが2009年に実施した第４回フォーラム「日本のアート・ドキュメンテーション－20年の達成－MLA連携の現状，課題，そして将来M（useum），L（ibrary），A（rchive）（アート・ドキュメンテーション学会創立20周年記念第４回アート・ドキュメンテーション研究フォーラム）」[(3)]は、日本のMLA連携の開花とも位置付けられており、以降MLA連携研究の発展は元より、研究書等の出版にまで及んだ[(4)]。

そのJADSにおける第52回見学会（2011年７月23日実施）に國學院大學「学術メディアセンター（以後略称と使用されているAMCと表記）」施設である図書館と博物館[(5)]が選ばれた。なお当日の見学会は近隣の「温故学会」も対象となっており、その報告は『アート・ドキュメンテーション通信』91号（2011年11月発行）に掲載されている。見学会のタイトルが「國學院大學学術メディアセンター（AMC）--MLA連携の現場を訪ねて」であった。

著者は比較的早くMLA連携の活動に注視してきた。勤務してきた國學院大學の渋谷キャンパスの図書館は多量の古書を所蔵し、更に書庫閉架率97％の１世代前の図書館の書庫内は、貴重書・特別コレクションは別とは言え、版本・写本の和装古書が一般の洋装本と同じ書架記号で一緒に排架されているなど、早くから希少性の高い資料に馴染んでいた。またここにおいてこうした和古書と貴重書・特別コレクション、そして一般図書との差異は何か。更に当時から学内に設置されていた考古学・神道・大学史の３部門の資料室との相違など、図書館業務を通じて資料の相違性や利活用等様々思うところがあった。

その後その延長から思いを具現化する様に、拙著「人文系資料を中心とした大

学図書館・大学博物館連携」[6]として調査結果を発表した。調査を実施した2007年の当時は、現在の図書館と博物館が所在するAMCは建設中で、調査対象は旧図書館並びに当時の考古学資料室・神道資料室となり、結果として國學院大學は連携事業として高得点とはいかなかった。当施設AMCが開設して10年経て、果たしてAMCはそして國學院大學はJADSの見学会で指摘した通り、MLA連携を推進している現場と言えるのだろうか。それについて検証をしたのが本論である。なお調査手法は先述の「人文系資料による大学図書館・大学博物館連携」に則っており、その上で大学のM（Museum）とL（Library）の連携（以後ML連携と表記）を主とした調査となっている。

## 1．「MLA連携」概要

先でも触れた様に、MLA連携は博物館・図書館・文書館の頭文字をとった、この文化資産を扱う3種館の連携のことである。この3種館の連携については以前から着目されていた[7]が、2008年のIFLA（International Federation of Library Associations and Institutions＝国際図書館連盟）並びにOCLC（Online Computer Library Center, Inc.）のリポート報告[8]、そしてこれも先に紹介した2009年のJADSの第4回フォーラムを契機に注目をされ、関係書籍の出版はもちろんのこと、その後学術情報辞典でも掲載されるまでに至っている。また現在、図書館の情報ポータルである国立国会図書館の「カレントアウェアネス」においてもキーワードとして設定されている。

用語解説については文部科学省の掲載[9]、そして『図書館情報学用語辞典』の掲載内容[10]を紹介したい。

> 「MLA連携･･･ミュージアム（Museum）･図書館（Library）･文書館（Archives）の連携のこと。それぞれの頭文字をとってMLAと呼ばれる。いずれも文化的情報資源を収集・蓄積・提供する公共機関であるという共通点を持ち，情報資源のアーカイヴ化等の課題を共有していることから，近年，連携の重要性が認識されてきている。」（文部科学省）

> 「MLA連携： 博物館（Museum），図書館（Library），文書館（Archives）の間で行われる種々の連携・協力活動．2008年，IFLAとOCLCからMLA連携についての報告書が出されたのを契機に関心が高まっている．日本でも博物館，図書館，文書館は元来，文化的，歴史的な情報資源の収集・保存・提供を行う同一の組織であったものが，資料の特性や扱い方の違いに応じて機能分化した一方で，施設の融合や組織間協力を続けてきた．近年，ネット

ワークを通した情報提供の伸展に伴い，利用者が各機関の違いを意識しなくなりつつあることを踏まえ，組織の枠組みを超え，資料をデジタル化してネットワーク上で統合的に情報提供を行うための連携・協力などがなされている．」（『図書館情報学用語辞典』）

そうした中、MLA連携の表記についても、「LAM連携」、「LMA連携」など並び順が異なるものや、その内容や組織体などから「MLA融合」、「MALUI連携」、「MULTI連携」、「GLAM」、「saveMLAK」（博物館・図書館・公文書館・公民館（K））等もある。それぞれの意味合いも異なり対象とする内容についても相違点を持つが、ここでは３機関の連携として「MLA連携」を用いており、総称としてこの連携事業に触れていく。

## ２．調査の概要

この度の國學院大學におけるMLA連携、特にＭとＬの連携調査については、先述の通り拙著の手法に則った。内容を３分野で検討をし、その総合性から評価を行っている。

なおこれも先に触れた通り、先の調査の際JADS見学会の対象でもあったAMCの設置前だったこともあり、國學院大學の指数は決して高くなく、MLA連携実施機関と言うに及ばなかった。それでは現在のAMCはML連携が如何程か、調査方法に則り見ていきたい。

調査方法として、先ずMLAそれぞれの機関の資料をレベル化し、１次資料、２次資料、３次資料の三段階とした（図表１）。１次資料を唯一性の高い希少資料、２次資料を流通資料、３次資料を目録資料とし、低次（３次・２次）資料と高次（１次・２次）資料が補完・活性化する関係と位置付けた。この資料の相関関係より、今回の研究では図書館（２次）資料と博物館（１次）資料の関係に焦点を定め、その資料を主として扱う図書館と博物館の異種館連携を対象とした。

図表１　「資料レベル相関関係表」

| 資料レベル | 取扱い難易度 | 内容 | 図書館 | 博物館 | 文書館 |
|---|---|---|---|---|---|
| １次資料 | 難 | 希少資料 | 貴重資料<br>（図書館１次資料） | 博物館<br>１次資料 | 文書館<br>１次資料 |
| ２次資料 | 中 | 流通資料 | 図書館<br>１次資料 | 博物館<br>２次資料（レプリカ） | （翻刻資料等） |
| ３次資料 | 易 | 目録 | 図書館<br>２次資料 | 目録 | 目録 |

## ３．連携の設定

図書館と博物館の連携には様々な種類が想定できる。ここでは大きく三つの連携に焦点を定めた。資料管理・検索をするための「目録の連携」、所蔵資料の「展示の連携」、施設としての連携と図書館専属職員としての司書と博物館専属職員としての学芸員の連携を合わせた「組織の連携」である。

### ３．１　目録の連携

資料の保存、検索を安定させるために目録規則は存在する。図書館では流通資料、ここで述べる２次資料を中心としているため早くから国際基準としての目録基準「ISBD」が存在した。図書館資料と同様に博物館資料の目録を検討する場合、各施設の目録規則を設定するのではなく国際基準等の標準化された目録規則に準ずることが望まれる。本来資料の性質が異なることを考慮すれば、図書館資料と博物館資料を同じ目録規則に当てはめるのではなく、それぞれを標準化された目録規則を利用することが現実的である。目録規則に準じているからこそ資料情報の保存・検索が安定する可能性が高まるのである。

また目録の連携を考慮する際、入力するスタッフのことも検討する必要があろう。資料の性質は異なるものの１次資料と２次資料で目録作成を分業化、もしくは集中型の目録作成をしているか、更に機関内の目録基準を作成する際共同事業としているか、様々な内容が想定される。

最終的には博物館１次資料と図書館２次資料がシームレスに調査・検索できることが望まれ、現段階での目録連携の目標となるであろう。

下の図表２は目録の連携を図書館と博物館それぞれの内容でレベル化したもので、レベル１に図書館１次資料（貴重資料）の公開と博物館１次資料目録作成とし、レベル３に博物館１次資料・図書館２次資料の横断検索を挙げた。

図表２　目録の連携のレベル化

| | | |
|---|---|---|
| レベル３ | 博物館１次資料・図書館２次資料　横断検索 | |
| レベル２ | 博物館目録作成支援 | 博物館１次資料目録国際標準化 |
| レベル１ | 図書館１次資料Web等公開 | 博物館１次資料目録作成 |
| | 図書館 | 博物館 |

### ３．２　展示の連携

本来施設の利用者が図書館と博物館の連携を体験できるものは展示であることは疑いがない。展示についても大きく２種類を想定した。現物展示とデジタル展示である。現物展示は本来の展示を指すもので、古来より行われている施設が見

学者を想定した現物資料の展示である。そしてデジタル展示は近年のデジタル技術の躍進により発展したヴァーチャルの展示である。デジタルを活用した展示のため、施設の現物展示の補足的活用もできるが、近年のWeb環境の発展によりWeb展示という場所を選ばない展示も想定できる。このデジタル技術の発展により、施設という枠を超えた居場所を問わない新たな展示方法が生まれたといえる。

この現物展示とデジタル展示という２種類の展示においてもML連携の想定が可能である。この２種類の展示に関して連携をレベル化したものが図表３である。

図表３　展示の連携のレベル化

| | | |
|---|---|---|
| レベル３ | ネットワーク連携 | 展示施設連携 |
| レベル２ | 展示用PC連携 | 並列展示連携 |
| レベル１ | 簡易展示連携（２次資料紹介リーフレット等） | |
| | デジタル展示連携 | 現物展示連携 |

「現物展示連携」のレベル３は「施設連携」とも関係が深いが、設問回答内に展示施設の連携内容が触れているものはここに含めた。以上展示における博物館１次資料と図書館２次資料の連携が想定した内容である。

### ３.３　組織の連携

いかなる方法でのML連携が想定されても、実はその施設運営者である人的な連携が生まれなくては実現されない。この組織の連携は運営を視点にして、ML連携を想定したものである。

図表４　組織の連携のレベル化

| | | |
|---|---|---|
| レベル３ | その他相互サポート | 共同体制の取れる施設 |
| レベル２ | 質問相互サポート | |
| レベル１ | 人的交流 | |
| | 人的連携 | 施設連携 |

ここでも図表４のとおりレベル化して表記した。しかし当時の設問で「施設連携」について詳細な設問を設定しなかったため、ここをレベルの細分化は行わなかった。ただし施設連携を具体的記載してもらう中で顕著な事例が見られれば内容によってレベル化は可能であろうが、検証内容がぶれない様に今回も当時の内容を踏襲した。

## 4．調査結果

### 4．1　2007年の調査結果

人文系の資料を対象とした大学のML連携の質問紙調査を、2007年９月20日～10月15日に実施し、回答館は博物館17機関18館（回答率66.7％）、図書館18機関18館（回答率69.2％）であった。

その結果は以下のとおり（図表５）。

図表５　「質問紙調査によるML連携レベル一覧」

<table>
<tr><td>レベル３</td><td colspan="2">博物館１次資料・図書館２次資料　横断検索<br>0.0％</td><td>ネットワーク連携<br>0.0％</td><td>展示施設連携<br>2.8％</td><td>その他相互サポート<br>27.8％</td><td rowspan="3">共同体制の取れる施設<br>11.1％</td></tr>
<tr><td>レベル２</td><td>博物館目録作成支援<br>0.0％</td><td>博物館１次資料目録国際標準化<br>0.0％</td><td>展示用PC連携<br>0.0％</td><td>並列展示連携<br>16.7％</td><td>質問相互サポート<br>30.6％</td></tr>
<tr><td>レベル１</td><td>図書館１次資料Web等公開<br>55.6％</td><td>博物館１次資料目録作成<br>50.0％</td><td colspan="2">簡易展示連携（２次資料紹介リーフレット等）<br>0.0％</td><td>人的交流<br>25.0％</td></tr>
<tr><td rowspan="2"></td><td>図書館</td><td>博物館</td><td>デジタル</td><td>現物</td><td>人的</td><td>施設</td></tr>
<tr><td colspan="2">目録の連携</td><td colspan="2">展示の連携</td><td colspan="2">組織の連携</td></tr>
</table>

大学における人文系については、その史資料の性質から見てもML連携の可能性が高いと想定していたが、調査結果から見ると当時積極的なML連携は極めて少ないと言う結果だった。目録の連携においてレベル１と設定した内容は各々の機関による目録作成であり、連携と言う視点で見ると直接的なML連携ではなく基盤に過ぎない。更にその内容も約半数であり、顕著な連携事業は見受けられない。強いて言えば、人的な連携が４分の１程度散見され、ここはML連携の兆しと見ることも出来た。

そうした中でも積極的連携が行われている機関として紹介したのが、A大学（都合により仮名）・大谷大学・山形大学の３大学である。３大学とも「目録の連携」のレベル１は当然のこと、「組織の連携」の人的連携そして「展示の連携」の１次資料の並列展示連携は行われている。更に大谷大学と山形大学は、施設において共同体制が取れており、また山形大学は展示施設連携も行われていた。

図表６　「A大学　ML連携レベル一覧表」　※網掛け実施事項

<table>
<tr><td>レベル3</td><td colspan="2">博物館1次資料・図書館2次資料　横断検索</td><td>ネットワーク連携</td><td>展示施設連携</td><td>その他相互サポート</td><td rowspan="3">共同体制の取れる施設</td></tr>
<tr><td>レベル2</td><td>博物館目録作成支援</td><td>博物館1次資料目録国際標準化</td><td>展示用PC連携</td><td>並列展示連携</td><td>質問相互サポート</td></tr>
<tr><td>レベル1</td><td>図書館1次資料Web等公開</td><td>博物館1次資料目録作成</td><td colspan="2">簡易展示連携（2次資料紹介リーフレット等）</td><td>人的交流</td></tr>
<tr><td></td><td>図書館</td><td>博物館</td><td>デジタル</td><td>現物</td><td>人的</td><td>施設</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2">目録の連携</td><td colspan="2">展示の連携</td><td colspan="2">組織の連携</td></tr>
</table>

図表７　「大谷大学　ML連携レベル一覧表」　※網掛け実施事項

<table>
<tr><td>レベル3</td><td colspan="2">博物館1次資料・図書館2次資料　横断検索</td><td>ネットワーク連携</td><td>展示施設連携</td><td>その他相互サポート</td><td rowspan="3">共同体制の取れる施設</td></tr>
<tr><td>レベル2</td><td>博物館目録作成支援</td><td>博物館1次資料目録国際標準化</td><td>展示用PC連携</td><td>並列展示連携</td><td>質問相互サポート</td></tr>
<tr><td>レベル1</td><td>図書館1次資料Web等公開</td><td>博物館1次資料目録作成</td><td colspan="2">簡易展示連携（2次資料紹介リーフレット等）</td><td>人的交流</td></tr>
<tr><td></td><td>図書館</td><td>博物館</td><td>デジタル</td><td>現物</td><td>人的</td><td>施設</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2">目録の連携</td><td colspan="2">展示の連携</td><td colspan="2">組織の連携</td></tr>
</table>

図表８　「山形大学　ML連携レベル一覧表」　※網掛け実施事項

<table>
<tr><td>レベル3</td><td colspan="2">博物館1次資料・図書館2次資料　横断検索</td><td>ネットワーク連携</td><td>展示施設連携</td><td>その他相互サポート</td><td rowspan="3">共同体制の取れる施設</td></tr>
<tr><td>レベル2</td><td>博物館目録作成支援</td><td>博物館1次資料目録国際標準化</td><td>展示用PC連携</td><td>並列展示連携</td><td>質問相互サポート</td></tr>
<tr><td>レベル1</td><td>図書館1次資料Web等公開</td><td>博物館1次資料目録作成</td><td colspan="2">簡易展示連携（2次資料紹介リーフレット等）</td><td>人的交流</td></tr>
<tr><td></td><td>図書館</td><td>博物館</td><td>デジタル</td><td>現物</td><td>人的</td><td>施設</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2">目録の連携</td><td colspan="2">展示の連携</td><td colspan="2">組織の連携</td></tr>
</table>

各表からは３大学ごとの特出した内容は見出せないが、表５の実行されている連携をほとんど盛り込んでいることが分かる。そうした意味でも３大学の中で連携事業が最も少ないA大学の６項目（図書館１次資料Web等公開、博物館１次資料目録作成、（１次資料の）並列展示連携、人的交流、質問相互サポート、そ

の他相互サポート）はML連携の基本事項と見ることが出来る。また連携の進行状況を見ると、「山形大学」＞「大谷大学」＞「A大学」という図式も見えてくる。

### 4.2　國學院大學AMCのML連携

図表9　「國學院大學　ML連携レベル一覧表」　※網掛け実施事項

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| レベル3 | 博物館1次資料・図書館2次資料　横断検索 | | ネットワーク連携 | 展示施設連携 | その他相互サポート | 共同体制の取れる施設 |
| レベル2 | 博物館目録作成支援 | 博物館1次資料目録国際標準化 | 展示用PC連携 | 並列展示連携 | 質問相互サポート | |
| レベル1 | 図書館1次資料Web等公開 | 博物館1次資料目録作成 | 簡易展示連携（2次資料紹介リーフレット等） | | 人的交流 | |
| | 図書館 | 博物館 | デジタル | 現物 | 人的 | 施設 |
| | 目録の連携 | | 展示の連携 | | 組織の連携 | |

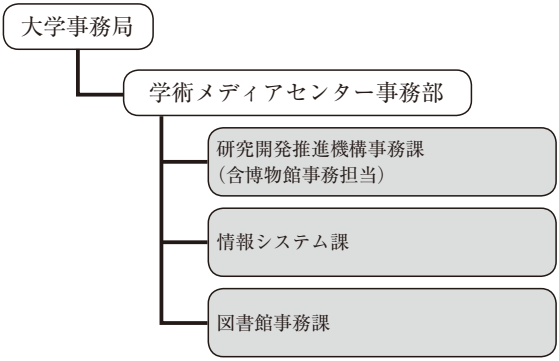
國學院大學AMCのML連携の現状について図表9の様になった。見ての通り最も評価の高い山形大学よりも連携が進行していることが分かる。特に「目録の連携」のポイントが高くなっているが、これは通常の資料目録についての事業ではなく、國學院大學「デジタル・ミュージアム」[11]の運営に起因する。

國學院大學のデジタル・ミュージアムは、調査から遅れること2年後の2009年5月15日に正式稼働した[12]が、所蔵資料のWeb展示の機能も持っているものの、研究データベースの集合体の態を成している。その点データベースの展示とも見ることも出来るが、ここで使用されている目録記述がISBDに則った『日本目録規則1987年版』改訂三版に準拠しており、これを採用し記述項目の設定を図書館員が担当したことがこの結果を生んでいる。これもデジタル・ミュージアムの技術的運営に関するワーキンググループ・メンバーに図書館員が参加していることが大きな要因である[13]。デジタル・ミュージアムに特化しているとは言え、目録に精通している図書館員が参加している意義であり、その意味でここでも組織・人的な交流はML連携の大きな要素と見ることが出来る。

またデジタル・ミュージアム並びにOPACから横断検索を行う機能を設けており[14]、デジタル上でのML連携の完成度は高いと言える[15]。

更に組織について触れる。そもそも國學院大學においては、國學院大學図書館と國學院大學博物館は別組織となっているが、先から触れているように両機関ともAMCと言う同施設内に設置されており、更に事務局組織においては「学術メディアセンター事務部」の配下にあり[16]、通常の事務は当然のこと、研修等を通じて業務交流・人的交流もなされている。また國學院大學博物館の母体でもある「研究開発推進機構」の「企画運営委員会」において、國學院大學博物館は当

然のこと、國學院大學図書館の事務課長もメンバーとして参加しており、情報の共有化がなされている[17]。




## 5．展望と課題

今回の調査は約10年前の調査手法であるが、國學院大學におけるML連携は高いポイントを取得することが出来た。

近年学界は元より現場でもMLA連携は顕在化されはじめ、図書館・博物館・文書館が連携した企画展等メディアでも目にする程である[18]。そうした意味でも、MLA連携によって利用する側が一番恩恵を被るのは運用もしくは企画展等のイベントであろう。各機関の１次資料による連携などは最も分かりやすく簡易な連携と言える[19]。平成30年度に國學院大學博物館で実施されたまたは予定されている企画展・特別展・特集展示等の20展示の中で、半分を超える13展示が図書館所蔵資料も展示資料として含まれており、その内４展示は図書館所蔵資料を主とした展示である[20]。これは國學院大學図書館に貴重資料・特別コレクションにおいて優れた１次資料等を所蔵していることでもあるが、そのためにも図書館と博物館の組織的な交流が推進されており、これによる賜物としての展示の連携と言えよう。

MLA連携と言う趣旨からすると、本調査では「A」所謂アーカイヴ（Archive）について触れていない。先述の通り、MLA連携は資料レベル間の連携、特にレベル１とレベル２の連携を重視するとしたものの、國學院大學におけるアーカイヴについても説明しておきたい。國學院大學博物館の３つの常設展示の内一つは大学の歴史を扱う「校史資料」の展示であり、また研究開発推進機構に属する「校史・学術資産研究センター」、ここを主とした展示には大学史を中心とした大学関係文書等も扱っており、文書館機能も持ち、また展示対象となっていることを添えておきたい。

拙著の調査は2007年のものであり、日本国内ではMLA連携が注目の兆しのある段階ではあるものの、各館にその動きは明確でなかった。図書館・博物館を併存していることから“MLA連携の現場を訪ねて”と言う当時において革新的なサブタイトルを付けたJADSの企画として、開館して間もない國學院大學のAMCをMLA連携の現場として紹介したことも、結果として決して的外れな企画ではなかったことが分かり、またAMCを早くに注目した当時の学会の着眼にも感服する。強いて挙げるなら國學院大學のMLA連携の成果を学会で紹介し、活動内容等実態についても理解を深めるべきであろう。今後もMLA連携の活きた現場としてAMCの施設・組織が発展し続けていくことを期待する。

## おわりに

拙著「人文系資料を中心とした大学図書館・大学博物館連携」でも触れたが、積極的なMLA連携の推進するためには組織連携の構築すること。その漸次的過程として主題を設けてプロジェクト等を立ち上げることを第一として提案している。山形大学附属図書館の「紅花プロジェクト」[21]は組織的な連携は既にあったとは言え、主題を冠したプロジェクトの事例としては最適なものとして紹介している。その点國學院大學は文系総合大学であり、また開学以来国史・国文・国法の研究に重きを置くなど特長が明確な大学であることを考慮すれば、大学と言う組織自体が明確な主題を呈していると言える。現在では学部履修の中に共通教育プログラムを設け、その中に「國學院科目群」を設置するなど、授業科目にも大学の特長を活かしている。そうした特長に焦点を定めれば大学の資産である史資料・人材が主題に集中していくことで、自ずとMLA連携への道が開けていくと言えよう。文部科学省による私立大学助成事業である平成28年（2016）度「私立大学研究ブランディング事業」[22]のタイプB（世界展開型）において「「古事記学」の推進拠点形成―世界と次世代に語り継ぐ『古事記』の先端的研究・教育・発信―」が採択された結果[23]も、本学の学統を継承並びに現研究者たちの研究業績は当然のこととして、本学のMLA連携の機能がその基盤にあったと言えよう。

大学において資料・組織の戦略性を持たせる意味でも、MLA連携は有効な手段となることは重要なポイントである。また日本でMLA連携が注目され約10年経過したが、今大学界にどこまでMLA連携が浸透し実践されているか、興味は尽きない。

**謝辞**

大和博幸先生、長きに渡り本学の図書館そして司書課程をお導き頂き深く感謝申しあげます。今後とも益々御活躍頂くと共に、本学図書館・司書課程を温かく見守って頂きたくお願い致します。今までありがとうございます。

**註**

（1）後でも触れるが，文部科学省用語解説や『図書館情報学用語辞典』などで広く解説されている。

（2）第 1 回アート・ドキュメンテーション学会研究フォーラム「美術情報と図書館」（1994年11月開催），そのシンポジウム「ミュージアム・ライブラリ・アーカイヴをつなぐもの」ではすでに「MLA」の文字を見ることが出来る（水谷長志. MLA 連携: アート・ドキュメンテーションからのアプローチ. カレントアウェアネス. 2011-06,（308）, p. 20-26.,（研究文献レビュー）.）。またその後も MLA 連携に関する数々の報告や発表を継続している。

（3）水谷長志, 山崎美和. 日本のアート・ドキュメンテーション: 20年の達成: MLA 連携の現状，課題，そして将来: 予稿集＋資料編. アート・ドキュメンテーション学会. 2009-12, 150p.,（アート・ドキュメンテーション研究フォーラム / アート・ドキュメンテーション研究会編，第 4 回）.

（4）水谷長志. MLA 連携の現状・課題・将来. 勉誠出版. 2010-06.、日本図書館情報学会研究委員会. 図書館・博物館・文書館の連携. 勉誠出版 2010-10（シリーズ・図書館情報学のフロンティア, no. 10）.、石川徹也, 根本彰, 吉見俊哉. つながる図書館・博物館・文書館: デジタル化時代の知の基盤づくりへ. 東京大学出版会. 2011-05.　などがある。

（5）「國學院大學博物館」は文部科学省の「オープン・リサーチ・センター事業」（参照「オープン・リサーチ・センター整備事業の概要について」http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shinkou/16koudokasinki/018.htm　参照2018-10-15）の平成19年（2007年）度に採択された「伝統文化リサーチセンター」施設として「伝統文化リサーチセンター資料館」と称して2008年に開館した。

（6）安達匠. 人文系資料を対象とした大学図書館・大学博物館連携. アート・ドキュメンテーション研究. 2010-03, no. 17, p. 3-17.

（7）次の様な文献が挙げられよう。中野目徹. 公文書館の所蔵資料: 図書館・博物館との連携に向けて（図書館雑誌. 1990-08, vol. 84, no. 8, p. 505-508.）但しほとんどは「MLA 連携」の名称は用いられておらず、そうした中で先述（註 2）の第 1 回アート・ドキュメンテーション学会研究フォーラム「美術情報と図書館」のシンポジウム「ミュージアム・ライブラリ・アーカイヴをつなぐもの」は先駆的な例と見ることが出来る。

（8）IFLA のリポート：アレクサンドラ・ヤロウ, バーバラ・クラブ, ジェニファー-リン・ドレイパー著; 垣口弥生子, 川崎良孝訳. 公立図書館・文書館・博物館: 協同と協力の動向. 京都大学図書館情報学研究会, 2008-12, 68p.,（KSP シリーズ, 7）.
OCLC のリポート：Diane M. Zorich, Günter Waibel, Ricky Erway. *Beyond the Silos of the LAMs: Collaboration Among Libraries, Archives and Museums*. OCLC research, 2008-09, 59p., https://www.oclc.org/content/dam/research/publications/library/2008/2008-05.pdf,（参照 2018-10-15）.

（9）文部科学省ホームページ「用語解説」（大学図書館の整備について（審議のまとめ）－変革する大学にあって求められる大学図書館像－）http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/attach/1301655.htm,（参照2018-10-15）.

（10）日本図書館情報学会用語辞典編集委員会. 図書館情報学用語辞典. 丸善出版, 第 4 版, 2013-12, 284p.

（11）「國學院大學デジタル・ミュージアム」は Web で公開されている無料データベースである。http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/（参照2018-10-15）

（12）「「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」プロジェクトについて」において開設までの経緯が説明されている。http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/html/DMP.html（参

照2018-10-15）

（13）前掲註12に立ち上げ時（平成19年度・20年度）に関わる企画委員並びにワーキンググループ・メンバーが掲載されている。

（14）今年９月にヴァージョンアップした國學院大學図書館OPAC「K-aiser」、そして９月以前の旧ヴァージョンにおいても、図書館の蔵書とデジタル・ミュージアムの横断検索機能を設けている。https://kaiser.kokugakuin.ac.jp/（参照2018-10-15）

（15）前掲註６「人文系資料を対象とした大学図書館・大学博物館連携」p.13においても１次資料と２次資料の横断的検索を重視しており、その点図書館の蔵書とデジタル・ミュージアムの横断検索機能の設置は高い評価としている。

（16）國學院大學の事務組織については大学ホームページでも確認出来る。https://www.kokugakuin.ac.jp/about/introduction/p2-2（参照2018-10-15）

（17）「研究開発推進機構人事一覧」としてWebでも公開している。http://img.kokugakuin.ac.jp/assets/uploads/2018/04/80ea11033dfc6d92b3fbd46aafc6acd8-1.pdf（参照2018-10-15）

（18）最近であれば、静岡新聞（2018年７月６日）では、浜松市（静岡県）の、地域と博物館、美術館、図書館の連携による「市文化遺産デジタルアーカイヴ」を紹介。また上毛新聞（2018年９月２日）では、今年の豪雨等の災害に触れながら文書館や博物館といった資料を扱う機関との連携について紹介している。

（19）前掲註６「人文系資料を対象とした大学図書館・大学博物館連携」p.12でも触れたが、積極的ML連携とは言い難い。

（20）図書館所蔵資料を主とした4つの展示は次の通り。

・企画展「吉田家：神道と典籍を伝えた家～國學院大學図書館所蔵吉田家旧蔵資料～」（会期：2018年３月３日～５月15日）

・企画展「國學院大學図書館 春の特別列品 ―久我家の明治維新― 」（会期：2018年４月19日～５月20日）※国の重要文化財、清華家久我家旧蔵史料「久我家文書」の展示

・特集展示：明治150年記念「明治日本における伝統と近代」（会期：2018年10月23日～12月２日）※井上毅旧蔵史料「梧陰文庫」の展示

・特集展示「國學院大學図書館所蔵　那智参詣曼荼羅巻子本の仕立てを探る―東京文化財研究所による光科学的調査の成果報告―」（会期：2018年12月５日～2019年１月14日）

なお展示の詳細は國學院大學博物館ホームページに掲載されている。http://museum.kokugakuin.ac.jp/ （参照2018-10-15）

（21）山形大学紅花プロジェクト実施ワーキンググループ. 山形大学附属図書館の紅花プロジェクト:「紅花の歴史文化館」誕生記. 東北地区大学図書館協議会誌. 2007-04, no. 58, p.1-10.
またデータベース「紅花の歴史文化館」にも詳細が掲載されている。http://www2.lib.yamagata-u.ac.jp/benibana/project/tanjo.pdf（参照2018-10-15）

（22）「私立大学研究ブランディング事業」（文部科学省）http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shinkou/07021403/002/002/1379674.htm（参照2018-10-15）

（23）「國學院大學古事記学センター」公式ホームページ　http://kojiki.kokugakuin.ac.jp/（参照2018-10-15）